

日本社会心理学会会報

215号

発行 日本社会心理学会 <http://www.socialpsychology.jp/>

編集・制作 広報委員会(担当常任理事:宮本聡介)

2017年1月12日

日本社会心理学会第58回大会・開催報告

日本社会心理学会第58回大会が2017年10月28日と29日に開催されました。

概要報告

期日:2017年10月28日~29日

会場:広島大学東広島(西条)キャンパス

大会準備委員会委員長:坂田桐子

1. 参加者数 616名(予約参加 460名, 当日参加者 156名, うち招待者 24名)
2. 発表件数 招待講演(兼, 常任理事会との共同開催による公開シンポジウム)1件, 大会準備委員会企画シンポジウム 2件, 自主企画ワークショップ 8件, 口頭発表 103件, ポスター発表 258件
3. 発表取り消し ポスター発表 2件

P301 雨宮有里・松本昇・高史明・杉山崇 日常生活で意図的・無意図的に想起される自伝的記憶の性質—経験サンプリング法を用いて

P243 中山満子 web 上での情報探索と態度変容



大会参加記

国際的に活躍する研究者になるために: 大石繁宏先生と増田貴彦先生の研究会に参加して

荻原 祐二



社会心理学会の大会前日企画として開催された広島社会心理学研究会に参加し、海外で顕著な活躍を続けておられるバージニア大学の**大石繁宏先生**とアルバータ大学の**増田貴彦先生**の講演を聞き、様々な貴重なお話をお伺いすることができた。主に若手の会員を対象として開催され、国際的に活躍している研究者の姿勢や考え方に直接触れることで、研究者としてのステップアップに役立てるという趣旨であった。これまでの思い入れのある研究や最新の研究を含めた一連の研究紹介に加えて、師匠との出会いや海外で研究を行うようになった経緯、それぞれの研究を行うことになった背景、海外での研究活動の実態といった、普段の研究発表では伺えないお話も含まれた、内容の濃い講演であった。

私は、社会・文化の変容が人々の心理・行動傾向にどのような影響を与えているかに興味があり、特に歴史的には個人主義文化とは言い難い日本において個人主義化が進むことで、対人関係や幸福感がどのような影響を受けているかについて研究を行ってきた(詳細については、Ogihara, 2017, in press; 後者は、大石先生とセント大学の Ayse Uskul 先生が編著された書籍“Socioeconomic environment and human psychology: Social, ecological, and cultural perspectives”の一章であり、2018年2月にOxford University Pressより出版される)。このように、お二人の先生方とは研究分野が近く、普段から大変お世話になっており、研究の具体的な話をお伺いすることが多かった。

しかし、なぜその研究を行うことになったのかという理由や、そのアイデアが生まれた経緯など、実際の成果を生み出している背景やそのプロセスについて知る機会は多くはなかった。最終的なアウトプットである洗練された論文を読むだけでは分からない、その成果を生み出した研究活動の背景やプロセスを知ることができ、参考になった。「情熱大陸」や「プロフェッショナル 仕事の流儀」等の番組を見ているような印象も受け、どういった考え方や価値観を持って、研究活動を進めているのかを窺い知ることができた。比較的インフォーマルな場だからこそお話しして下さった内容もあり、ここでは内容の単純な要約はしないが、講演の中で私が印象に残った点について3点述べる。

第1に、英語が堪能でない研究者が海外で研究活動を始めようとする際に、英語でコミュニケーションを取るためには、できないことは気にせず、できることに注意を向けて積極的にコミュニケーションを取り続けることの重要性が語られた。国際的に活躍することを阻害する要因の一つが言語の壁であり、英語を用いたコミュニケーションについての質問が多かった(事前に参加者から質問を受け付け、多かったものから先生方に回答して

頂く形式であった)。現在、アメリカとカナダでそれぞれ教鞭を取られているお二人の先生でさえ、海外生活を始めた当初は、英語でのコミュニケーションに非常に苦労したとのことであった。その中で、ひとつの対応策として、ラボミーティングや普通の生活においても、理解できなかった内容はひとまず置いておいて、理解できた内容について質問やコメント、返事をする事等が挙げられた。私はこれまで、博士1年次に3か月程アメリカに、博士3年次に2か月程ヨーロッパ諸国に、ポスドク時に1年程アメリカに滞在して研究を行ってきた。その時の経験を思い出し、先生方のアドバイスに同意し、完璧ではないけれども、とにかくできる範囲でコミュニケーションを主体的に取り続けることが効果的と感じられた。そして実際にそうした姿勢を見せていけば、寛容に受け入れてくれることが多かった。海外から日本に来ている方たちが必死に日本語でコミュニケーションを取ろうとしている姿を見ると、こちら側もなんとかしたいと思うことが多いのではないかと。また、日本における英語教育の影響もあると思われるが、英語の語彙や文法を重点的に学習するため、誤りのない完璧な文章を話さないといけないと思いき、結果として話さないということが多いように感じられる。完璧でなくても意図や情報はある程度伝わるが、話し始めないと何も伝わらないということをお二人の先生方のお話から改めて感じた。

第2に、インパクトの強い研究を行うためには、(社会)心理学の一部の論文・書籍を読んでいるだけでは十分ではなく、他分野の論文・書籍や、自分の経験や感覚から研究のアイデアを得て発展させることが効果的ではないかという点が話題となった。自分の研究分野に関する論文や書籍をフォローするのは当然で、それに加えて別の視点や知識をインプットして用いることが、よりインパクトの強い研究を生み出しているようである。一方で、論文としてまとめて世の中に出さなければ、研究をやっていないことと同じで、全く評価されないというアウトプットの重要性についても語られた。特に若手研究者において、アウトプットが求められる程度がより高まっているように感じられるが、インプットとアウトプットのバランスを取りながら、質・量を高めていくことが必要と思われる。インプットすることでアウトプットが可能となり、アウトプットすることによってインプットの質が高まることを考慮すると、限られたリソースの中で、その両輪をいかに効率良くかつバランス良く回すかに工夫が求められるように感じた。

第3に、英語の文章を推敲する際に、自分が書いた文章をPC上で音読させ、それを聞いて確認しているという具体的な情報が共有された。文章やその内容を確認する際には、「その文章を書いた時の自分」という主観から離れて、より客観的な視点で文章を見直すことが重要だと思われる。私自身も、特に重要な文章については、時間を置いて読み直したり、音読をして文章の内容やリズムを確認したり、他者に確認してもらうという作業を行ってきた。これらと並んで、自分が書いた文章を自分ではなく、機械に読み上げさせることで、より客観的に文章の確認ができるのは効果的だろうと感じた。

上記以外にも興味深いお話がたくさんあり、非常に有意義な企画であった。最後に、大変お忙しい中、このような貴重な機会を作って頂きました小宮あすか先生、橋本博文先生、準備・運営を行って頂いた皆様、そして大石先生と増田先生に心より御礼申し上げます。

(おぎはら ゆうじ・京都大学)

社会心理学会大会参加記

寺口 司



昨年に引き続き、台風の直撃が心配されましたが、参加される先生方の祈りが通じたのか、無事に開催される運びとなりました。広島大学にお邪魔するのは数年ぶりでしたが、市内巡回バスが増えたり、西条駅自体が改装されていたりと、ここ数年でのこの地の盛り上がりを感じさせるものでした。大会自体への期待も高まります。

外は雨風が強く、天候はやや荒れ模様でございましたが、いざ会場内に入ってみれば、そこかしこで議論の嵐が巻き起こる、何とも熱気のある空間でした。如何せんアクセスが難しい会場ですので参加者数が少ないのかと思いきやそんなことはなく、どの教室に伺っても立ち見が出るほどの大盛況となっているほどです。そのような大盛況の中でも円滑に大会が運営されたのも、準備委員会の先生方、大会運営スタッフの皆様方のご尽力によるものでしょう。

今回の大会でも口頭発表、ポスター発表、WS、シンポジウムに招待講演と、研究漬け・議論漬けの2日間を過ごさせていただきましたが、全体として感じたのは方法論がますます多彩になってきたという点です。これは年々感じることはありますが、例えばポスター会場を見渡せば、「fMRI」や「遺伝子」、「経験サンプリング法」などの単語がより多く目につくようになってきました。またWSやシンポジウムにおきましても新たな方法論についてのお話も増えてきているように思います。例えば大会2日目に行われたシンポジウム「多様な個性を創発する分子・神経・社会基盤の統合的理解を目指して」では、これまで心理学で扱われてきた「個性」がどのような経緯で生じるのかを、多様な領域と連携し脳やDNA等の側面から検討を行うという学際的な内容でした。また、WS「視線追跡(eye tracking)技法利用の可能性」では、以前から認知心理学等で用いられてきた視線追跡技法を消費者行動の研究にどのように応用してきたのか、そして今後の研究にどこまで応用が可能かについて、具体的な運用方法や注意点、問題点とともにレクチャーが行われました。例に挙げた2つのシンポジウム・WSはどちらも今後の研究の視点を押し広げるものであったと感じます。思い返せば、前回の社会心理学会前日企画では「社会心理学では方法論の発展が少ない点が重要な課題である」というお話もございました。しかし近年の状況を見る限りには、そうも悲観的な話ではないのかもしれない。

一方で、従来の方法論を用いたとしても、新しい切り口をもって社会を科学することも可能なのだと感じます。大会1日目にはVirginia大学の**大石繁宏先生**による特別講演「**幸せの心理学**」では、「幸せとは何であるか」についてこれまでの一連の研究をご紹介いただきました。これらの研究では、幸福の変化がどこで起きるのか、国ごとの幸福の特徴など、様々な角度で検討を行っており、幸福について体系的な理解が進むものでした。その研究の多くは従来の方法論である質問紙調査で行われていたのですが、1つのテーマを様々な視点で検討することによって、多くの知見が得られています。研究を切り開くのは新しい方法論だけではないということを感じました。

大会に参加させていただくたびに様々なことを学ばせていただきますが、今回の大会では「常に新しくあること」、この重要性について改めて再認識させていただく機会となりました。それは方法論だけではなく、物事の考え方や研究の切り口など、常に新しいものを取り入れて自分自身をアップデートし、そして研究に活かしていくことの重要性です。研究の多彩化が進んでいるのを見ると、求められるアップデートスピードも速くなっているように感じます。

今回の大会に関わられたすべての皆様に厚く御礼申し上げます。有難うございました。

(てらぐち つかさ・大阪大学)

日本社会心理学会大会第58回 参加記

山岡 明奈

今回、参加記を書くという貴重な機会をいただいたことに厚く御礼申し上げます。大変恐縮ではございますが、大会を振り返り、感じたことを書かせていただきます。

初めに参加したプログラムは、HSP スピンオフ「大会前日特別企画」でした。バージニア大学の石繁先生とアルバータ大学の増田貴彦先生のご自身のキャリアのお話は大変興味深く、これまで漠然と海外で研究をしたいと考えていましたが、具体的な先生方の経緯や状況をお聞きして、その目標が具体的なものへと変わりました。そして、一時的な留学だけではなく、海外の大学で就職するという選択肢があり得ることを知り、今後のキャリアについて考え直すきっかけとなりました。



口頭発表では、身近な人間関係のセッションが強く印象に残りました。階層線形モデリング、マルチレベル構造方程式モデリングや、行為者-パートナー相互依存性モデル、多母集団同時分析など、それぞれの分析手法の特徴について改めて勉強する機会となりました。また、対人関係と社会環境の関連について深く考えさせられました。

ポスター発表では、京都学園大学の服部陽介先生の「思考抑制の逆説的効果と反すう傾向の関連」が印象的でした。自分の研究テーマ(マインドワンダリング)と関連深い内容であったため学ぶことが多く、先生の丁寧なご説明や議論を通して、今後の自分の研究に関する多くの示唆を得ました。また、自身の研究テーマとは少し離れますが、福岡大学の一言英文先生の「協調的幸福感の文化比較 フィリピン・日本・ポーランドの比較」も大変興味深く拝聴しました。普段あまり触れない研究領域のお話を伺うことで、いつもとは違う視点から自分の研究について考えるきっかけをいただき、特にサンプリングと一般化可能性の問題について深く考えさせられました。1日目には研究懇親会があったため、ポスター発表を聞き終わった後に、レモンサイダーや広島名物などをいただきました。同世代の院生と談笑をしながら美味しい料理を堪能致しました。

大会全体を振り返ると、前日企画、ワークショップ、口頭発表、ポスター発表を通して、数々の研究を拝見し、非常に充実した時間を過ごせたと感じています。特に、研究手法や分析手法については学ぶことが多く、今後の自分の研究でも積極的に取り入れていかなければならないと感じました。また、研究の内容に関わるだけでなく、研究者としてのキャリアについても多くの先生方からお話を伺い、将来海外で研究することや、博士号を取得した後のあり方について改めて考えるきっかけをいただきました。同時に、先生方の職場環境、大学の内情の一端をお聞きして、大学教員・研究者として働くことの大変さを垣間見ました。今後は、ぜひ女性研究者のキャリアやライフプランに関してお話を聞ける機会があれば有難いと思いました。

初めて伺った広島大学は自然が豊かで、整然とした綺麗なキャンパスという印象を受けました。西条は私にとって非常に過ごしやすく、台風の影響で帰りの新幹線が止まるというハプニングもありましたが、前日企画も含めてのこの3日間、非常にのびのびとした環境で、充実した時間を過ごしました。最後になりましたが、準備委員会の先生方をはじめ、大会運営に尽力して下さった皆様に心から御礼申し上げます。

(やまおか あきな・筑波大学)

名誉会員推戴

本年度、3名の会員が名誉会員として推戴されました。大坊郁夫先生、山岸俊男先生、古川久敬先生です。心よりお祝い申し上げます。

「名誉会員の推戴を受けて」

大坊 郁夫 先生

名誉会員の推戴をいただきまして、篤くお礼申し上げます。21,22期の常任理事時期には、高木修会長のもと、編集委員長、事務局長を、その後、23,24期の会長を務めさせていただきました。また、2009年には23年ぶりに日本グループ・ダイナミクス学会との合同大会(56回)を大阪大学で開催いたしました。大会開催には準備、当日運営、その後の整理と多大なエネルギーを必要とすることであり、多くの人に支えていただいたお陰でこれらの仕事を続けることができました。改めて大阪大学時代の同僚、研究室 OBOG、学生諸氏に感謝いたします。



学会は、共通の関心を持った者達が任意に集まり、意見を交わし、刺激し合い、それぞれが何らかの示唆を得て日々の研究活動を続けていく

ための機会です。この趣旨は学会創設の時から何ら変わるものではありません。およそここ10年は1800名程度の会員数ながら大会参加者率は他学会に比べて高く(40%強)、大会準備・運営は容易でないことは事実です。この点を緩和する意味を込めて大会運営委員会が設置されましたが、会場校(場所)探しは難しくなっています。運営の簡素化のみならず、参加者自身も大会当事者としての役割を担うことなども検討すべきことかと思えます。また、会員は学会に何を求めているのか、改めて問う必要もありそうです。

私が初めて本学会大会に参加した第15回大会(1974年、岡山大)の発表数は、71件(翌年は50件)でしたから隔世の観があります(会員数は約600名)。今や、同時並行のセッションが多く、学会全体の研究動向を把握し難いほどです。

本学会は設立当初から学際性を重んじる気風があり、設立趣意書にも、「狭い意味での社会心理学の専攻者だけでなく心理学、社会学、政治学、経済学、文化人類学、宗教学、言語学など、互いに隣接する諸科学の研究者」が集うことが謳われています。時代の趨勢を考えるならば、今では脳科学、情報科学なども並ぶことでしょう。しかし、学会初期の貪欲な気風は今では乏しいようにも思いますがどうでしょう。「社会」の持つ意味を「敢えて」考えることも必要でしょう。

また、2000年以降、国際交流活発化が話題となり、2004年には大学院生海外学会発表支援制度(現在の[大学院生・若手研究者海外学会発表支援制度](#))、2007年には国際学会シンポジウム企画補助制度もスタートしました(2013年度に廃止)。しかしながら、国際化は決して順調ではないようです。近いところにはアジア社会心理学会(AASP)があります(大会は隔年開催、2001年には本学会協賛のシンポジウムを開催)^{註1}。今年の大会(Auckland)では、日韓中の関係改善に各国の社会心理学者はもっと貢献できるはずとの辛辣な意見・提案がAASP前会長のJames Liu先生からありました。各自の研究の先(あるいは基底)にある社会像の点検が求められていると受け取りました。

私は、学部生時代に対人的な適応—不適応に関心を持ち、その後、対人過程(コミュニケーション、親密化・崩壊)、社会的スキル(・トレーニング)などに関心を持ってきました。いずれも人のwellbeingへと総合される重要な側面と考えています。そして、どのテーマも社会心理学以外の領域と通じるものでもあります。特に、対人コミュニケーション研究については情報科学の研究者との連携は欠かせませんでした。コミュニケーション行動は発話、視線、身体動作など指標化すること自体に計測技術、方法の工夫が必要です。しかも、撮影、録音するだけでは仮説等を検討できるデータでは未だなく、さらに手数がかかります。まして日の目を見る研究成果になるのには時間がかかります。その故もあるのでしょうか、同学の研究者は多くはありません。計測技術の目覚ましい進展を活用して、社会行動の時間の過程をじっくり吟味できる(せざるを得ない)研究がもっと増えてもいいのではないかと思います。

^{註1} 本学会の“現代史”については、日本社会心理学会編(2009)、「社会心理学事典」の「日本社会心理学会の活動と展望の永田良昭『日本社会心理学会小史』(560-573)、大坊郁夫『日本社会心理学会が、今、そして、これからめざすもの-』(573-578)を参照ください (だいぼう いくお・東京未来大学)

「名誉会員推戴を受けて」

山岸 俊男 先生



この度社会心理学会名誉会員に推戴いただき、大変名誉に思います。私が社会心理学会に入会したのは大学院に進学した1970年ですので、それからほぼ半世紀にわたり学会のお世話になってきたわけですが、あつという間の半世紀でした。ワシントン大学で学位取得後帰国し最初に北大に奉職したのが1981年、北大を退職しワシントン大学に助教授として戻ったのが1984年、その後再び北大に戻って日本で本格的に研究と教育にコミットし始めたのが1989年ですから、それから考えてもほぼ30年です。その間にどれほどの研究と教育ができたかを考えると忸怩たるものがありますが、振り返ってみると感慨深い思いがあります。私は自分が1960年代の日本での社会心理学の一つの中心であった社会意識論の最後の生き残りだと思っています(社会意識論については私の最初の英文論文であるYamagishi & Brinton(1980)を参照ください)。1960年代の後半から70年代前半に私が一橋大学の学部生・大学院生をしていたころには、社会心理学は社会科学や心理学を含む統合人間科学の核となるべきだという恩師南博先生の主張を反映するかたちで、社会心理学会には心理学者だけではなく社会学や人類学などの隣接諸科学の研究者が集まっていました。その中で理論的に中心的な役割を果たしていたのが、主として精神分析学を基盤とするマイクロな分析とマルクス主義に基づくマクロな分析とを統合するマイクロ・マクロ理論をめざした、日本特有の社会心理学としての社会意識論でした。今では精神分析学もマルクス主義も影響力を完全に失ってしまいましたが、当時の社会意識論がめざしたマイクロ・マクロの学としての統合人間科学は、精神分析学を行動進化学に、マルクス主義をゲーム理論に置き換えるかたちで、いまや社会諸科学、生物学、心理学を含む巨大な理論的潮流として再生しています。社会心理学の心理学への埋没という環境に包囲された最後の生き残りだと思っていたのが、いつの間にか巨大な援軍の中に埋没しつつあるというのが、私の現状についての率直な感想です。(こうした意味での社会意識論の現代的再生については、山岸(1999; 2016)として採録)をご参照ください。)私が紫綬褒章と文化功労者を授与されたのも、北の大地に「独立王国」を築きつつ、マイクロ・マクロ社会心理学をめざす学部生時代からの信念を一貫して追求し続けたことが認められたのかとも思っています。現在の私の関心は、社会的環境に適応しながら進化し生きて暮らしている人間が、自分たち自身の行動を通して適応すべき社会的環境そのものを生み出していく「社会的ニッチ構築」の観点から、心の文化差や社会制度構築のあり方を分析することにあります。私に残された時間はあまりありませんが、その中で何とか自分の研究の集大成ができればと思っています。

以上、過去半世紀にわたる私の個人的な研究の軌跡について述べさせていただきましたが、その間に生じた国際化を中心とする社会心理学

界の変化についても一言感想を述べさせていただきます。二度目に帰国した30年前には、国際誌に論文を発表している日本人社会心理学者はほとんど皆無でした。また国際学会で発表をする研究者の数も限られていました。1990年代までは日本からの社会心理学の国際誌への発信は北大の寡占状態にあったといえるでしょう。この社会心理学のガラパゴス状況が大きく変化したきっかけは、今から振り返ってみると21世紀とグローバルの2つのCOEだったと思います。COE以前の大学院生にとって国際学会で発表するのは大事件でしたが、COEによる数多くのシンポジウムやワークショップへの参加の経験を繰り返す中で、「国内誌に発表した研究は、世界には存在しない研究だ(私の昔からの口癖)」ということの意味が理解できるようになり、また英語で研究の話をするに対する心理的な抵抗感が減ってきたのだと思います。現在の若手社会心理学者の間では、研究の国際的発信に関するクリティカルマスの達成されつつあり、ガラパゴス状態が払拭される日も遠くないだろうと思われます。最後に、近い将来には、先に紹介した人間・社会科学に生まれつつある大潮流から見放されないように、若い研究者の方々が学際的ガラパゴス化から脱することを期待して、この駄文を終えさせていただきます。

Yamagishi, T. & Brinton, M. (1980). *Sociology in Japan and shakai-ishikiron*. *The American Sociologist*, 15, 192-207.

山岸俊男 (1999). 「社会科学としての社会心理学」『UP』No. 316, 1-5.

山岸俊男 (2016). 「生きている社会: その作り方・ながめ方」Pp.195-210. 小川(西秋) 洋子・太田邦史『*生命デザイン学入門*』(岩波書店).

(やまぎし としお・一橋大学)

2017年度日本社会心理学会賞 第19回選考結果のお知らせ

今年も例年にならった方法により論文賞および出版賞の選考が行われました。慎重に審議した結果、下記の各論文と著作が授賞対象として選出されました。

○優秀論文賞

慎重な選考の結果、本年度の優秀論文賞は該当なしと決まりました。

○奨励論文賞

三浦麻子(Asako Miura)・稲増一憲(Kazunori Inamasu)・中村早希(Saki Nakamura)・福沢愛(Ai Fukuzawa)

『**地方選挙における有権者の政治行動に関連する近接性の効果: 空間統計を活用した兵庫県赤穂市長選挙の事例研究**』(第32巻第3号, pp.174-186)

本論文は、地方選挙における社会的影響という社会心理学的に重要な問題を扱っており、その題材の斬新さ、特定の候補者に同行しながらGPSを用いて選挙活動中の移動履歴を記録して回答者の選挙活動との近接性を変数化するという革新的な方法論が高く評価されました。

○出版賞

亀田達也(Tatsuya Kameda)

『**モラルの起源—実験社会科学からの問い**』(岩波書店)

社会心理学だけでなく、隣接諸科学の成果を統合してモラルの起源と様々な問題の解決に向けたその応用について平易かつ詳細に解説しており、総合的に見て最もバランスがとれていることが高く評価されました。

○出版特別賞

木下富雄(Tomio Kinoshita)

『**リスク・コミュニケーションの思想と技術: 共考と信頼の技法**』(ナカニシヤ出版)

社会心理学の研究手法を基盤としながら、社会問題の解決を目指す実践的試みについて示す、著者が長年手がけてきたリスク・コミュニケーション研究の集大成とも言える書で、その長年にわたる蓄積と今になってもまったく衰えることを知らない(むしろ挑戦性の度合いを増す)展開に敬意を表して、特別賞として推薦されました。

○選考委員会

委員長: 岡隆

委員: 池田浩、石井敬子、内田由紀子、高橋伸幸、樋口匡貴、松井豊(以上、理事)、田中知恵、森久美子(以上、編集委員)、石黒格、三浦麻子(受賞経験者)

(文責: 岡隆・編集担当常任理事)

受賞者のことば

奨励論文賞(2年連続2回目)ありがとうございました

三浦 麻子



昨年度に引き続き、奨励論文賞を受賞できたことを大変ありがたく思っています。前回の「Satisfice」研究も今回の「市長選挙」研究も、「ひよんなきっかけから着想した研究ネタを実現してみたらこうなったので論文にまとめた」ものであるという点は共通しています。ちょうど本稿を書いている2017年11月初旬に「競争的資金では画期的研究を行いにくい理由」という言説がネット上の「まとめ記事」としてあがっており、ある研究者が「画期的な研究成果を創出するのに競争的資金は向いていない」旨を論じていました。私も、別のテーマで競争的資金を頂戴しつつ、賞をいただいたのはそれとはまったく無関係の、個人研究費等々をやりくりして実施した研究でしたので、確かにそうかもなあ、と思います。思いつきを実現するのに、競争的資金の申請から獲得というペースはのんびりすぎていて合わないし、当然、獲得できないリスクも少なくありません。それならば資金的サポートの手厚さよりも研究の自由度の高さを取ろう。授賞式の際に「48にもなって2年連続奨励なんて…」と申し上げたのは本音ですが、研究業界の現状を鑑みますと、挑戦的な試みができたのはそのくらい年を重ねたからこそ、なのかもしれません。

研究に明示的な社会的貢献が求められる昨今、論文刊行と同時に大学からプレスリリースを出すのを習慣としています。何が貢献するかよくわからないので、とりあえず手がかりは提供しておこうという意図です。たいていは免罪符にしかならないのですがこの研究は違いました。すぐにマスメディアからコンタクトがあり、大小いくつかの記事になりました(例えばAERA dot.記事)。それは先日の総選挙の時も同様でした。興味深いのは、彼らは私が面白いと思っている点—選挙運動の空間移動情報と有権者の社会調査データを結びつけた分析方法—は一顧だにせず、ひたすら「選挙運動への近接はその候補者への投票を増す効果がある」という結果に食いつくことです。研究者にとってむしろ(解釈が難しいという意味で)面白いのは、それが候補者個人の好感度には影響を持たないことなのですが、彼らにとっては「あんなに迷惑な選挙運動が票になる!?!」という思いが強いようです。ともあれ、方法的な意味で学界に、結果的な意味で社会に、それぞれいくばくかの貢献ができたのであれば、思いつきを実現してみた甲斐があったというものです。

ここ5年ほど、研究フィールドの1つとして選挙(政治)に注目しています。選挙における投票は、市民にとって社会参加の権利であると同時に、高度な意思決定過程を伴う社会的選択場面でもあります。いずれの意味においても、理想的には、市民は投票に際して能動的に情報を収集し、判断のための問いを明確化し、論理的に考え、価値に基づいて合理的な意思決定をすることが期待されています。投票行動は、その(集合的な)結果が有権者自身の市民としての生活に直接的に反映されるものですから、社会的行動の中でも重要度が高く、こうした行動を支える心理・社会的メカニズムを解明することは、社会心理学者にとって興味深い課題だと思うからです。実際SPSPなどでは、政治に関わる多くのワークショップや発表があり、例の大統領選挙の衝撃や世界的なポピュリズム跋扈の様相もあって、今後も注目度は高まりそうです。しかしどうしたわけか、日本社会心理学会では政治に関する研究はどちらかというとマイナーで、大会のセッションで発表するメンツは数年来代わり映えがせず、聴衆も少なめです。今般の「リベラルとは何か」論争にも端的に示されるとおり、イデオロギーというコア概念が欧米より曖昧なまま、学問的にも放置されてきたことが原因かもしれません。とはいえこれは逆説的に考えれば「今がつけ込みどころ」でもあるかもしれません。是非多くの聡明かつ意欲的な社会心理学者の参入を求めたいところです。

ごく個人的には、「想定外」と言いたくなるような経験が多くあった時期に、「研究するという楽しさがあれば生きていける」ということに気づかせてくれたのがこの研究でした。共著者のお三方、謝辞にお名前を挙げさせていただいた皆さん、そして主査と副査の方々に心から感謝申し上げて、受賞の言葉の結びとさせていただきます。

(みうら あさこ・関西学院大学)

亀田 達也

拙著『モラルの起源—実験社会科学からの問い』(岩波新書)に出版賞を頂き、有難うございます。「実験社会科学」という、海のものとも山のものともつかない無謀な企てを好意的に評価していただいたこと、審査者の方々に心から感謝申し上げます。

以下は、執筆動機に関わる自己開示です。

世界は「脱真実」(post truth)の時代に入っていると言われています。大方の予想を覆しトランプ氏が選出された2016年の米大統領選では、政敵や移民・外国についての攻撃的な発言が、リベラルやエリートへの反発のなかで人々の感情や信念に訴え、客観的な事実を無視した脱真実としてインターネットで増幅しました。私にとって、モラルをめぐる社会の部族的な分断が、(よく知っていると勝手に思い込んでいた)「あのアメリカ」で、これほど大きなスケールで噴出したことは強い衝撃でした。その一方で、トランプ氏の支持者のことを deplorable と切り捨てたクリントン氏の発言に強い違和感を覚えたことも事実です。自分が Rust Belt の住人だったら、ほぼ絶対にクリントン氏にはなく、トランプ氏に投票しただろうと考えるためです。金成隆一著『ルポ トランプ王国—もう一つのアメリカに行く』(岩波新書)は、Rust Belt の人々の息遣いや絶望を伝える名著です。



こうした脱真実の時代に声高に「モラル」や「正義」を論じることには幾重にも緊張と含羞を伴います。拙著は、それでも人文社会科学が「正義の味方」を論じねばならないことの意味を、実験社会科学の観点から考えてみようという(身の丈に合わない)試みでした。モラルの基盤を、社会生態学的な文脈における生存戦略として捉える拙著の視座には、可能性と限界の両方があると考えています。気がつけばいつの間にか残り10年余となってしまった研究者生活の中で、この限界の意味を、若い研究者の方々との協同を通じて一緒に真面目に考えていければと強く願っています。

今後ともさまざまな折にご議論いただけると幸いです。この度は本当に有難うございました。

(かめだ たつや・東京大学)

木下 富雄



特別出版賞を頂き有り難うございました。望外の喜びです。衷心より感謝のこぼを述べさせていただきます。

リスクコミュニケーションの研究を始めたのは1980年台のことで、最初に発表したのは第30回の社会心理学会でした。当時院生だった吉川肇子さんとの共同研究です。でも会場からの反応は芳しいものではなく、なぜ自分にとって不利な話をしなければならないのかとか、そもそもリスコミってなに?といった雰囲気が強かったようです。

リスコミの話は社会心理学会の会員にとって興味がないのだと感じ、それ以降の論文執筆や学会発表はリスク学会や自然科学系の学会にシフトしました。当然ながら日本の先行研究はゼロに近かったので、理論構築も実証データの獲得も一から始めざるを得ません。道は険しかったけれども逆にそのことが、外国の下敷きでないオリジナルな研究に繋がったと思います。それから30年。そこへ降って湧いたのが今回の受賞です。社会心理学会の会員の中にも、リスコミの大切さを理解している方がおられたのだと、そこが最大の喜びでした。

ところでリスコミは伝統的な説得的コミュニケーションと違って、「共考」と「信頼」をキーワードとする新しい対話技法です。そこで扱うピクスは、ベネフィットとリスクが葛藤する面倒なものが中心です。したがって世間を騒がす事件が発生したとき、よりニーズが高まる傾向があります。そこでは当然ながらアカデミックな側面とともに、実践的な側面が必要になってきます。かつて輸入冷凍食品の安全性が問題となったときリスコミが良く用いられましたが、F1の事故以来、低レベル放射線影響のリスコミが大規模に実施されるようになりました。私自身も官公庁や自治体、それに市民団体や生協さんから依頼されて何十回もリスコミをさせて頂いています。それでも需要に追いつかないので、最近はリスクコミュニケーターの養成にも力を注いでいる次第です。

社会心理学におけるコミュニケーション効果の研究に用いる対象者のほとんどは学生ですが、リスコミの場合はほぼ一般市民です。当然個人分散は大きくなります。市民の関心の方向や論理構造はバラバラだし、会合のセッティングや雰囲気も千差万別です。その分、コミュニケーターの力量が成果に大きく影響します。苦勞も多いです。でもリスコミがうまく進んで市民の方たちと心が通う瞬間があり、それが何よりの喜びといえましょう。忘れることのできないのは、東北でリスコミをした時の市民が、あのときは嬉しかったと後からお歳暮を贈って下さったり、たまたま近くに所用があったので、私の京都の自宅にまで地酒を持参して下さいました。これまでの研究者生活では一度もなかった経験です。私はその時ほど研究者冥利を感じたことはありません。

その意味で今回の受賞は私個人ではなく、お世話になった多くの方々、中でも市民の方たちに対して頂いたものだと思います。これら大勢の市民に替わりまして、改めてお礼の言葉を申し上げたいと思います。本当に有り難うございました。

(きのした とみお・国際高等研究所)

日本社会心理学会平成29年度一般公開シンポジウム

「幸せの心理学-哲学書とデータから考える幸福論-」

10/28に一般公開シンポジウムが開催されました。講演者の大石繁宏先生より、会員向けメッセージを頂戴しました。

今年度の日本社会心理学会に参加して自分の大学院時代を振り返ってみた

大石繁宏

今年度の社会心理学会の基調講演にご招待いただきありがとうございました。当日は、たくさんの方々に来ていただき光栄でした。以下学会へ参加した際の感想を簡単に述べさせていただきます。

大会前日にアルバータ大学の増田先生と一緒に若手相手にワークショップをしました。これは若手に海外に行ってもらおう、国際舞台で活躍してもらおうという趣旨だったと思います。僕の場合、完全に行き当たりばったりの留学(学部時代に1年)を経て偶然が偶然を重ねて(たまたまガールフレ



ンドが在米中の韓国人)アメリカの大学院に行くことになり、また最終的にアメリカの大学に就職することになりました。田舎の公立高校出身ですので、英語は特にできたわけではありません。ヒアリングは特に困りました。でもまあ授業とかはゆっくり話してくれるし、教科書も自分のペースで読めばいいわけだとなんとかになりました。一番困ったのは大学院のセミナーで他の院生が何を喋っているのかさっぱりわからなかったことでしょうか。ただ後で気づいたことですが、あんまり筋の通った話ができる人はアメリカ人でも少ないので、全部わからなくても問題は無いんですね。

アメリカの大学院の何が素晴らしかったのだろうか改めて考えてみると、やっぱりいろんな人の研究の話や聞く機会がとにかく多かったことでしょうか。JPSP に載っている論文であれば、読むことに関しては日本にいてもアメリカにいても一緒なのですが、Brownbag トークなどで聞くとやっぱり裏話が聞けるし、年に100トークくらい聞いていたのでイリノイ大学院の5年間で聞いたトークは500を軽く超えていると思います。そこでどんな研究が評価されているのか、評価されないのかとか、どうやってその問題にタックルすることにしたのかとか、どうやったら曖昧な概念を実験操作できるのかとか段々わかってきました。また、わかりやすい説明の仕方とか、トークでやらない方がいいこととかもやっぱり肌で勉強できた気がします。そこが日本のアカデミアにずっといるとなかなか経験できないことだと思うんです。ひどいトークもたくさんありました。時間の無駄だなあと感じたことも多々あります。ただ、どこがどうして気に入らなかったのか、どこがどうして気に入ったのかとかを他の院生や教授達と議論できたことはとても貴重でした。今、ジャーナルの編集をするうえでもこれは非常に役に立っていると思います。ですので、若手の皆さん、1年でもいいので北米などで修業(?)するのは貴重な機会だと思います。是非やってください。書類、準備は勿論面倒です。直接の利益(実験いくつやれるのかとか論文いくつ書けるか)は少ないかもしれませんが。ただ考え方が変わると思うんです。研究とか学問への考え方、アプローチが。

院生時代を振り返り、院生の時はやはりDov Cohen(当時イリノイ大学のAssistant Professorだった)とくに憧れていたことを思い出しました。あのクリエイティビティはいったいどこから来るのかってね。これ、直接彼に聞いたら「JPSP とか読まない方がいいよ」と言われました。代わりにいろんな本を読みなさいってね。個人的にはJPSP は読んでいた方がいいと思いますが、心理学以外の本を読まないとなんか問題提起ができなくなるのかなあとは思っています。いい研究ができるかは8割方いい問題提起ができるかで決まるもんね、結局。院時代にこういうアドバイスを憧れの心理学者から直接聞いたのもラッキーでした。

ということで、大会前日は説教臭い話でしたが、大会自体の感想に移ります。シンポジウムで思ったのは日本の社会心理学はアメリカよりずっと神経科学やイメージングとの連携が強いんだなあということです。アメリカの社会心理学では2000年代こそfMRIなどの研究もさかんでしたが、過去10年ほどはやや落ち目の感じですね。というか神経科学と社会心理学との統合がなかなかうまくいっていないという感じがします。ところが日本の場合(すくなくとも今年度のシンポを見た限り)、これがうまいいっているみたいなの印象を受けます。これは霊長類研究がずっと日本の先端研究の一つだったから社会心理学者でも自然と神経科学とかヒトの研究に入りやすいのかもしれない。

シンポジウムでは、マウスだけじゃなくてカイロから社会心理を探求するというラディカルで独創的研究もありました。Self-esteem と胎児期のホルモンとの関連を見たりする研究も初耳でした。また、Eye-Tracking を利用した研究なども多く、日本の社会心理学者の技術の高さを感じました。最後に、日本の社会心理学者の多くは防災や環境破壊、高齢化社会、自動化社会など社会全体の問題についての研究も多く、社会貢献、知識の社会還元率ではアメリカ社会心理学者のそれよりも遥かに高い印象を受けました。

僕自身は社会心理学は社会の成り立ち、それを起こす心理、それから生まれる心理を研究していく学問だと思っているので集団が日本ではまだ重要トピックに残っていることも喜ばしいことだと思いました。集団パフォーマンスや社会規範などは社会心理学の王道のはずですが現在のアメリカ社会心理学ではほぼ無視されている現状です(集団の研究自体がビジネススクールに移ってしまいました)。ですので、その辺の研究を地道に続けられれば世界的に認められる論文、知見になっていくのではないかと思います。

アメリカでは道徳心理学が流行りで、政治心理学もほぼ道徳心理学のアプローチが中心になっています。また階層、格差も人気のトピックです。あと偏見やステレオタイプの研究もアメリカの方が随分さかんですが、これはアメリカの歴史から来るもので日本の社会心理学会でほとんど偏見やステレオタイプの研究がなかったのもある意味文化的で面白かったですね。あと感情もあんまり日本では人気ないみたいですね。まあアメリカでもかなり研究しつくされた感はあると思いますが、道徳心とか感情とか日本の社会心理学者があまり研究していないというのは今の日本人が道徳心とか感情とかに興味がないということなののでしょうか、あるいはそれらは窮屈すぎると思われるのでしょうか。いずれにせよ人気トピックの日米差も面白かったです。

最後になりましたが基調講演へ招待して下さった広島大学の小宮さんにお礼を申し上げます。

(おおいし しげひろ・ヴァージニア大学)

第5回「春の方法論セミナー」のお知らせ

第58回大会総会において、日程のみアナウンスをさせていただきましたが、今年度も「春の方法論セミナー」を開催いたします。大会時には、セミナーの希望についてアンケートを実施させていただきました。ご協力くださったみなさま、誠にありがとうございました。今年度は会場を明治学院大学(白金キャンパス)に移し、アンケート結果も踏まえ、2教室を使って2つのセミナーを並行して開催いたします。年度末でお忙しい時期とは存じますが、大勢のみなさまのお越しをお待ちしております。大変申し訳ありませんが、セミナーの詳細については、まだ検討中の部分が残っており

ます。決定次第、メールニュース等でお知らせ申し上げます。

3月21日(水・祝) 13:00~17:00(予定)

開催場所 明治学院大学(白金キャンパス)

セミナー1「経験サンプリング A to Z(仮題)」

主にこれから経験サンプリングを実施したいと考えていらっしゃる方、経験サンプリングの方法を詳しく知りたい方を対象とし、経験サンプリング研究の実際の方法、データハンドリング、分析の留意点などを実践的に扱います。

セミナー2「RとRstudio 入門(仮題)」

Rは近年多くのパッケージがそろい、活用範囲も広がり、導入の好機が来ているように思われます。けれども、周囲に詳しい人がいない場合、なかなか手を出しにくいということもあるかもしれません。使ってみたいけれど、まだ、本格導入をしていない、といった方を念頭においた、RとRstudioの基本講座です。RとRstudioの基本ならびに、Rならではのデータの可視化の方法について取り上げる予定です。

(工藤恵理子・学会活動担当常任理事)

会員異動(2017年6月21日~12月15日)

入会

《正会員》

・一般会員 菖蒲順子(国立研究開発法人日本原子力研究開発機構核燃料サイクル工学研究所計画管理室副主幹)、李 範爽(群馬大学大学院保健学研究科リハビリテーション学講座教授)、岡田 豊(武蔵野大学大学院通信教育部人間学研究科研究生)、高橋美智子(上智大学大学院総合人間科学研究科心理学専攻大学院生)、中原裕之(国立研究開発法人理化学研究所脳科学総合研究センターチームリーダー)、奈良元壽(帝京平成大学健康メディカル学部臨床心理学科教授)、西口雄基(上智大学総合人間科学部心理学科学術振興会特別研究員)

・大学院生 青木香保里(大阪大学大学院人間科学研究科)、石原綾華(放送大学大学院文化科学研究科情報学プログラム)、北原由絵(名古屋大学大学院情報科学研究科)、木原悠朔(九州大学大学院人間環境学府)、久保英信(放送大学大学院文化科学研究科)、黒川優美子(神戸学院大学大学院人間文化科学研究科)、佐藤アソカ(東北大学大学院文学研究科行動科学研究室)、高野了太(京都大学大学院教育学研究科)、トウ ケイ(目白大学大学院心理学研究科)、西濱健太郎(広島大学大学院社会科学研究科)、福光直美(広島大学大学院社会科学研究科)、本田志穂(広島大学大学院総合科学研究科)

退会 稲木哲郎、内海裕里花、岡田知子、緒方宏明、加藤はるみ、彼谷直子、川浦康至、工藤 亘、小島英子、後藤彩花、本元小百合、楊 帆

自然退会 青木康彦、池口 愛、池崎宏昭、石川泰地、伊藤 彬、伊藤安代、岩男征樹、岩倉希、ウェンウエンジャンジラ、ト部敬康、大島朗生、大関智宏、小川 響、片桐英毅、加納理沙、唐牛祐輔、金城卓司、國政朱里、櫻井隆充、佐藤直子、生野桂子、砂川 愛、曾根美幸、高川風太、高橋 翠、武井恵亮、棚原健次、谷川賀苗、寺島 圭、堂免隆浩、中井由可子、中尾聡史、中島由佳、永田 涼、中村磨奈、朴 喜静、原田鈴彦、細川政宏、范 知善、松本真実、松本陽子、溝口裕明、湊麻由佳、村川文梨、森 美月、諸橋泰樹、矢島誠人、山岡あゆち、山口隼ノ介、山田貴久、吉田未来

所属変更 増田匡裕(和歌山県立医科大学保健看護学部保健看護学部教授)、佐伯晴子(一般社団法人マイインフォームド・コンセント理事長)、高木英至(埼玉大学名誉教授)、川野健治(立命館大学総合心理学部教授)、唐沢 穰(名古屋大学情報学研究科)、中島純一(中央学院大学現代教養学部教授)、福岡欣治(川崎医療福祉大学医療福祉学部臨床心理学科)、三木ひろみ(流通経済大学教授)、尾花恭介(PwC コンサルティング合同会社)、中川由理(京都橘大学)、鈴木文子(大阪市立大学大学院文学研究科・都市文化研究センター研究員)、渡辺 匠(北海道教育大学教員養成開発連携センター特任講師)、高田琢弘(独立行政法人労働者健康安全機構労働安全衛生総合研究所過労死等調査研究センター研究員)、田中大貴(玉川大学脳科学研究所嘱託研究員(科研費研究員))、井上和哉(筑波大学助教)、川久保 惇(立教大学大学院現代心理学部ポストドクトラルフェロー)、野崎優樹(京都大学大学院教育学研究科特定講師)、草野広大(University of Nevada, Reno)、田中友理(名古屋大学情報学研究科)、朴 ゴウン(名古屋大学大学院情報学研究科)、村中昌紀(日本大学大学院文学研究科研究員)

『社会心理学研究』掲載(予定)論文

第33巻第1号(2017年8月刊行)

金政 祐司・浅野 良輔・古村 健太郎 愛着不安と自己愛傾向は適応性を阻害するのか? ~周囲の他者やパートナーからの被受容感ならびに被拒絶感を媒介要因として~

岩谷 舟真・村本 由紀子 規範遵守行動を導く2つの評判:居住地の流動性と個人の関係構築力に応じた評判の効果

第33巻第2号(2017年12月刊行)

宮崎 弦太・矢田 尚也・池上 知子・佐伯 大輔 上方比較経験と関係流動性が親密な二者関係における交換不安に及ぼす影響

福島 治 関係文脈内の自己と他者の特性表象の重複:石井(2009)の再現研究

戸谷 彰宏・中島 健一郎 存在脅威管理理論における Affect-free claim の再考:死の不可避性に対する脅威がその後の気分に与える影響

佐藤 有紀・五十嵐 祐 制御焦点と向社会性:囚人のジレンマ課題を用いた検討

第33巻第3号(2018年3月刊行予定)

宮川 裕基・谷口 淳一 セルフコンパッションが就職活動における不採用への対処に及ぼす影響の検討

今瀧 夢・相田 直樹・村本 由紀子 リーダーの暗黙理論がチーム差配に及ぼす影響:失敗した成員に対する評価に着目して

竹中 一平・落合 萌子・松井 豊 違法・有害情報対策従事者の職務ストレスの実態とその関連要因

編集後記

常任理事就任後2つ目のニュースレターの編集を終えることが出来ました。執筆にご協力くださった会員の皆様には心より御礼申し上げます。第58回大会の総会でもアナウンスさせていただきましたが、これまで年に4号発行していたニュースレターの発行回数を、今後は2~3号に減らすことにしました。以前は、この会報だけが学会の活動を知る情報源でしたが、現在は学会の web サイト、学会広報委員会の web サイト、メールニュース、それに twitter など、たくさんの情報発信サイトを有しています。最新情報については、これらのサイトからの発信で十分に即時性を補えます。ニュースレターは、学会やセミナー開催後に、その様子を振り返る役割の方が重く、即時性というよりも、コンテンツの充実度を優先する時期が来たのではないかと考えています。会員の皆様にはその旨ご理解いただき、今後のニュースレターを温かく見守っていただければと思っています。

(宮本聡介・広報担当常任理事)